

## 刊行の辞

理事長 山崎 吉朗 YAMAZAKI Yoshiro<sup>1</sup>

「まずは10年頑張ろう」と言って来た JACTFL が10周年を迎え、本号は10号記念号になります。

10年の思いは多々あります。しかし、今回は各理事が10年の思いを語ってくれていますし、なりより、中野佳代子副理事長が大作「10年続けばその次につながる」を合言葉に一JACTFL10年の活動の軌跡を振り返る一をまとめました。私自身もいろいろと情報提供し、事実確認しました。JACTFLの設立の経緯に関して、保存版となる大作が出来上がりました。

私の方は、毎年の「刊行の辞」の冒頭の文章を、1号から9号まで抜粋します。複言語教育の10年にもなっているかと思えます。

### 第1号(2013年)

「やはり世論ですね」、「文部大臣の考えで動くこともあります」。

こんな会話を20年近く前に、文部官僚と交わした。1996年に開かれた日本フランス語フランス文学会春季大会のシンポジウム準備の時である。シンポジウムの主題として中等教育でのフランス語教育が検討され、英語以外の中等教育をどう発展できるかについて文科省に話を聞いた。1時間あまり話した結果、英語以外の外国語教育の発展は難しい。しかし、世論が盛り上がり、文部大臣の指示があれば変わるということで冒頭の発言があったのである。

(中略)

そんな中で一昨年(2012年)12月3日に日本外国語教育推進機構 JACTFL を設立した。20年間単独で行動して来た筆者にとって組織を作ることは悲願であった。それが実現した。最後の切り札である。そして、この機構の目的を実現するために大きな比重を占めるのがこの会誌である。外国語教育の流れを変える必要性を関係者、そして世間に訴え、流れを変化させるための手段である。

(中略 最後の文章)

簡単な道ではないが、さまざまな外国語教育関係者が手を組み、世論を作っていくことは不可能ではない。ともかく一歩一歩進む。この会誌第1号もその一歩だと信じ

---

<sup>1</sup> 所属：日本私学教育研究所 The Education Institute for Private Schools in Japan

ている。

#### 第 2 号 (2014 年)

2012 年 12 月 3 日に産声をあげた一般社団法人日本外国語教育推進機構 (以下 JACTFL) は 3 年目を迎えました。グローバル＝英語となってしまうような境界的な状況の中で、JACTFL の果たす役割はさらに大きくなっています。

#### 第 3 号 (2015 年)

「英語をはじめとした外国語教育の強化に文科省は取り組んでいる。」

大槻達也国立教育政策研究所所長の挨拶の一節です。同研究所主催のシンポジウム「初等教育段階における英語教育を考える～グローバル人材の育成に向けて～」(2016 年 1 月 19 日)の時です。

今後さまざまな場で積極的に引用していきたいと考えています。

#### 第 4 号 (2016 年)

「英語以外の外国語教育の必要性を更に明確にするとともに、学習指導要領の改訂に向けて、外国語教育における指標形式の目標設定を踏まえたカリキュラム研究、研修、教材開発などの取組について支援することが必要である。」

新しい学習指導要領に向けた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」の「英語以外の外国語教育の改善・充実」の中に上記の文言が記されました。ここで重要だと思われるのは、「英語以外の外国語教育の必要性」が明記されると共に、「支援」という言葉が盛り込まれたことです。その結果、昨年まで「英語教育強化地域拠点事業」という名の下で実施されていた事業が、装いを新たにして「外国語教育強化地域拠点事業」が平成 29 年度からスタートすることになりました。英語教育関連事業 25 件とは別に、多言語教育分野で 3 件が採択されます。

#### 第 5 号 (2017 年)

2012 年 12 月 3 日設立の JACTFL は 6 年目に入りました。創立当初、何とか 5 年間維持できればその先は続くと言っていた 5 年を越えました。これも JACTFL 会員、シンポジウム参加者初め、JACTFL を支援するみなさまのおかげです。JACTFL の活

動の中でもこの研究会誌は JACTFL の核として始めました。こちらも 5 号になりました。

#### 第 6 号 (2018 年)

第 3 期教育振興基本計画が発表され(2018 年 6 月 15 日)、重要な文言が載りました。第 2 部の「2. 社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成する」の項目「グローバルに活躍する人材の育成」に、「英語をはじめとした外国語教育」と記載されたのです。さらに、教育振興基本計画(本体)の 24 ページには、「初等中等教育から高等教育の各段階に応じた国際化に取り組む高等学校・大学等への支援や英語をはじめとする外国語教育の強化に努めるとともに、豊かな教養や論理的思考力、我が国の伝統や文化への深い理解、世界の多様な文化の中で自他の違いを尊重し合い... (下線筆者)」と記されています。5 年継続する教育振興基本計画に「英語をはじめとした外国語教育の強化」という文言が載った意義は大きいです。国の政策の中に、少なくとも英語以外が視野に入っていると解釈したいと思います。

#### 第 7 号 (2019 年)

外国語教育の歴史の中で、2019 年は記録に残る年となるでしょう。言うまでなく、大学入学共通テストを巡る動きです。英語の民間試験導入が 11 月 17 日に延期となり、12 月 17 日には国語、数学の記述試験の白紙見直しが発表されました。

(中略)

政治的な動きがあり、文科大臣が決断すれば、JACTFL が進めている「多様な外国語教育の推進」も、一挙に進むこともあるのでしょうか？ 2019 年の 7 月から 8 月に 5 回に亘って掲載された読売新聞「教育ルネッサンス 多言語教育」最終回のタイトルは、筆者と奈良教育大学吉村雅仁先生の「高校は 2 言語を必修に」でした。これも、政治が動けばあつという間に実現するのでしょうか？

#### 第 8 号 (2020 年)

2 月 27 日には全国の小中高の臨時休校が要請されて 4 日後にはほぼすべての学校が閉まり、試験も卒業式もほとんど中止されました。4 月 7 日には東京、大阪などに緊急事態宣言が出され、4 月 16 日には全国に拡大しました。全国の解除は 5 月 25 日。閑散とした都心の風景が何度も報道されました。

そんな中、3 月 8 日に予定していたシンポジウムは、2 月 22 日に中止を決定しました。基調講演に黒田隆之助氏をお願いしていたこともあり、既に 140 名以上の申し

込み者がありましたが、収束の見込みが立たない状況での実施は不可能でした。

### 第 9 号 (2021 年)

本号で第 9 号となりました。次は 10 号の記念号となります。

言い古されたいい方ですが、「十年ひと昔」ということばがあります。筆者がこのことばを最初に知ったのは、小学生の時、壺井栄の『二十四の瞳』を読んだ時と記憶しています。

(中略)

「十年をひと昔というならば、この物語の発端は今からふた昔半もまえのこととなる。」という文で始まり、普通選挙(男子のみ)が初めて行われた昭和三年の小石先生赴任から物語は展開していきます。

(中略)

私事になりますが、筆者の両親は昭和三年生まれでした。来年 10 年を迎える本研究会誌について考えた時にふと思いついた『二十四の瞳』が、実は両親が生まれた年に始まる物語だったということに、運命を感じました。両親から筆者が生まれ、そして仲間達と共に生を与えた研究会誌が 10 年を迎える前夜となりました。

10 年を振り返りました。毎年、一歩ずつでも進んで来たと自負しています。

次の 3 点を実現する為に JACTFL を設立したと、趣意書に明記しています。

- ①多様な外国語教育関係学会・団体を横断的に結びつけ、連携・協力を図る組織をつくる
- ②多様な外国語教育に係る活動についての情報を幅広く提供する場を設ける
- ③中等教育、特に高等学校における多様な外国語教育の普及を制度的に推進する

この 3 点を実現する為に、これから、10 年、20 年と、毎回のシンポジウムのタイトル「外国語教育の未来<sup>あす</sup>を拓く」を続けます。まだまだ道半ばです。今後共、ご支援、ご協力をお願い致します。

末筆になりましたが、今回も、論考 5 本、報告 7 本のご寄稿を頂きました。この研究会誌は JACTFL の活動の中心に位置しています。執筆者のみなさま、ありがとうございました。